



高橋教授の

この人に 会いたい

Vol.60

ゲスト

元村有希子 氏

毎日新聞論説副委員長

毎日新聞の元村有希子論説副委員長は第1回科学ジャーナリスト大賞(2006年)を受賞するなど長年、科学報道の第一線で活躍している。近著「科学のトリセツ」(毎日新聞出版)を切り口に、新型コロナウイルス対策で浮き彫りになった政治と科学の行き違いや、日本人の科学への向き合い方などについて、高橋泰・国際医療福祉大学教授と論じ合った。

コロナ禍だからこそ考えたい サイエンスとの向き合い方

医師をめざした高校時代 本との出会いが人生変える

高橋 元村さんが書いた「科学のトリセツ」は一般の人が科学のニュースとどう向き合えばいいかを、わかりやすい言葉でまとめています。その中でリケジョ(理系女子)の話が出てきますが、自身の高校時代を振り返ると、リケジョに相当する同級生は見当たりませんでした。私の周りだけでなく、日本で女性の科学者、研究者

が少ない要因は何ですか。

元村 複合的な原因があります。高校で理科や数学の成績がいい女子は、手に職がつき、社会貢献もできる薬学部や医学部進学を勧められます。物理や数学を勉強したいという女子が、親や先生から「お嫁に行けないよ」と言われるケースもあるようです。「女の子は科学に向かない」というアンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)にさらされ、進学の動機づけが下がってしまいます。ただ、女性は興味を持ったことに粘り強く取り

組み、共感力もありますから、研究に向いていると私は思います。

フィールズ賞を受けた数学者の広中平祐さんも「女性は科学に向いている。ナイーブで素朴で勇敢だから」とおっしゃっていました。

高橋 高校時代の元村さんはやはり、リケジョだったのですか。

元村 実は理工系にはあまり関心がありませんでした。医師だった父の期待もあり、なんとなくお医者さんを目指していました。高校3年の夏休み、たまたま図書館で河合隼雄さんの「カウンセリング

の実際問題」という本に出会いま

した。カウンセリングを通じて人の心を癒す道があると知り、心理学への関心が強まりました。共通一次試験は理系で受けましたが、二次試験は医学部でなく教育学部に出願しました。私が医学部を受けると思い込んでいる親に直接言えず、手紙を書いて、ちゃぶ台に置いて寝ました。翌朝、私が家出したのではと心配した母親が部屋に駆け込んできて、「あなたの人生だから、思うようにしなさい」と言ってくれました。

合議制で決める新聞の社説 不十分な集団免疫の議論

高橋 さて、「科学のトリセツ」を読むと元村さんはコロナについて2020年2月頃は、データを使い比較的楽観的な見方をしていました。20年の春頃から政府批判に向かいます。

元村 武漢での集団発生が報じられ始めたころ、私がテレビ番組でコメントした「今のところ死亡率は高くなく、過度に恐れる必要はない。正しく怖がるのが重要だ」との内容が、後になって批判されました。専門家も私も、結果的に見立てを誤ったわけです。その後、ダイヤモンドプリンセス号でのクラスター発生、前触れもなく実施

された全国一斉休校、思いつきで巨額予算が浪費されたアベノマスクなど、「最悪を想定せず、日本丸をうまく動かさない政府」への世間の怒りは募っていきました。

高橋 一方、当時私は「感染症7段階モデル」(新型コロナウイルスは大部分の人にとっては風邪のような症状で終わるが、血管が痛んでいるとハイリスクの疾患)を提唱して

いましたが、世の中のムードとは乖離しており、データを示しながらメディア関係者に説明して一時的に納得してもらっても後に「社の方針と合わない」ので掲載は難しい」という返答を何度もいただきました。やはり、社の方針には従わなければならぬのですか。

元村 社の方針が明文化されているわけではありません。ただ、新聞社の社説の場合、ストーリーや見出しは合議制で決めます。科学だけでなく、政治、外交、社会などさまざまな専門を持った論説委員が意見を戦わせます。「重い肺炎で亡くなっている患者がいるのに、PCR検査数はいっこうに増えない」「政府はオリンピックや経済を重視する半面、国民の命を守る対策には消極的だ」といった、



当時の世論に近い意見が多数を占めた時期もあります。先生がおっしゃる「騒ぎ過ぎだ」「もっと冷静に」といった考え方が出てくるのは、後になってからです。そう断定できるだけのエビデンスを、公開されているデータから得られなかったこともあり、混乱を

撮影=関口宏紀



不安を解きほぐす努力が不足していた — 元村

極める保健所や医療現場を見れば、政府の対応力不足は明らかでした。海外に比べ日本は感染者数が低く抑えられている状況は理解していたのですが。

高橋 日本の現状を考えると、やむを得ないところですね。コロナ対策では集団免疫が重要な論点になります。ワクチンがない状況ではウイルスは一気に広がりますが、一定数が感染すると次にうつす対象となる人が少なくなり、急激に新規感染者数が下がっていきます。集団免疫の考え方を政策に

明確に打ち出したのは英国やスウェーデンなどでしたが、日本ではこの議論が政府もメディアもほとんど取り上げませんでした。

元村 日本で集団免疫の考えを組み込むとすれば、獲得されるまでの間に、何人かは犠牲になる。それを許容するのかという意見が必ず出てきます。

高橋 程度の問題はありますが、自然の摂理ではないでしょうか。最終的な感染者数は既に決まっています、そこに到達しなければ収束しない。その事実を前提に議論す

なかなか通じにくい。

元村 確かに、日本人は確率論的な話が苦手です。皆さん、宝くじは買いますが(笑)。ややこしい理論とかプロセスは省いて、信用できる人に「大丈夫だ」と言ってもらいたいのだと思います。先日、官房長官がマスク着用について、「人との距離が十分取れば、屋外での着用は必ずしも必要でない」との見解を示しました。「三密はリスクが高い」ということは国民全員が知っているはずなの

に、偉い人に言ってもらわないと、人目が気になって外せない。

確率論的な考え方の浸透を 平時の備えこそ大事

元村 感染症との付き合い方は、誰かが号令をかける局面と、個々で判断する局面を分けて考えるべきです。ただ、国民の多くは膨大な情報を消化しきれていません。特効薬がないことや、後遺症への不安、ワクチンの副反応につ

過度に恐怖を煽った報道の検証も必要 — 高橋



元村 有希子

Yukiko Motomura
毎日新聞論説副委員長
もとむら・ゆきこ ●九州大学教育学部卒業。1989年、毎日新聞社入社。2001年、科学環境部に配属され、同部デスク、部長などを経て19年から論説委員。科学を題材にした交流の場「サイエンスカフェ」などを通じ科学コミュニケーション活動に力を入れるほか、富山大学、国際基督教大学などで教壇に立つ。テレビ・ラジオ出演も多数。著書に「理系思考」「気になる科学」「科学のミカタ」(いずれも毎日新聞出版)「カガク力を強くする!」(岩波ジュニア新書)など。

ることがサイエンスだと思っています。

元村 そのことを積極的にいってやってくれる方はいませんでしたね。

高橋 当初「42万人なくなる」とか、GOTOキャンペーンの直前、「日本でも10万人以上が亡くなる可能性がある」という予測が出ました。私は根拠を示しながら予測の数字を出されたのは評価すべきだと思います。しかし、なぜ、42万人あるいは10万人亡くなるならなかったのかを検証すべきでした。

元村 同感です。渦中にあるときは騒ぐけれども、収まったら、スーッと忘れてしまう。政府は今、コロナ対応を検証する有識者会議を開催しています。岸田さんが昨年の総裁選で公約したから、というところですが、次にやってくるパンデミックに立ち向かえる

いても、感じ方は人それぞれで、だから報道も難しいのです。そうした不安に伝える努力は、政治家や専門家、ジャーナリズムも含めて不足していました。

高橋 エビデンスなしに自分の感覚で話しても専門家というバッジを付けていけば、皆さんが耳を傾けます。しかし、西浦博先生らの一部の研究者を除き、テレビに頻繁に出演していた専門家と称する人のなかに、私には「サイエンティフィックに話していた」と感じさせる人は見当たりませんでした。

元村 コロナの「専門家」といいますが、全人類にとって初めて向き合うウイルスで、分からないことも多い中、どれだけ確実なことを言えるかといえればおぼつかない状況だったと思います。

内容になるかといえれば怪しい。医療資源は何がどれくらい足りなかったのか、この事業にこれだけの予算を投じる必要があったのか、など、きちんと検証すべきです。英国では専門家が遠慮会釈なくやっていますね。

高橋 国民性という言葉を使うと思考停止するため、あまり好きではありませんが、科学者の気質も国によって違うのでしょうか。

元村 科学と政治、科学と社会との健全な関係を築く必要があると思います。東日本大震災(2011年)の際、マグニチュード9の地震は起きない前提でデザインされていたインフラが壊滅的な被害にあり、地震学者の責任が問われました。そもそも進行中の科学には不確かさがあります。それを認識した上で、政治や社会が最善の判断をできるといいのですが。科学者の言葉を信じて、裏切られると急に態度が変わるあたりに、日本人のナイーブさも感じます。

高橋 その辺は科学教育の欠如のためでしょうか。客観的にデータを分析することや、確率論の話が

高橋 「10万人が亡くなるかもしれない」という予測の上にヒステリックにコロナの恐怖をまくしたてる報道が繰り返し行われた結果、給食での黙食が今だに続いたりしています。地域のお祭りが中止されたこと、自殺の増加、若い人が子どもをさらに産まなくなり少子化に拍車がかかるなどの事態を招いています。過度に恐怖を煽った報道の影響の検証も必要と考えます。

元村 私は20年ほど、科学コミュニケーションの活動をしていいますが、平常時にデータの見方や、確率論的な考え方をどれだけ浸透させられるかが、有事の際にきいてくると思っています。コロナが収まる気配になっているときこそ、科学コミュニケーションも頑張らないと。

高橋 感染することをどこまで許容するか、妥協点を探しながら日常生活を送る「ウィズコロナ」が大事で、「ゼロコロナ」を目指すのは間違っていることを社会的教訓として残す必要があるのでしょうか。本日はどうもありがとうございました。

高橋 泰

Tai Takahashi
国際医療福祉大学教授
たかはし・たい ●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進委員会医療福祉部門副会長を務めた。